

『黄金伝説』論：「精神の解放」について

李, 忠奎

(出版者 / Publisher)

法政大学国文学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

日本文学誌要 / 日本文学誌要

(巻 / Volume)

69

(開始ページ / Start Page)

63

(終了ページ / End Page)

73

(発行年 / Year)

2004-03

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00010086>

『黄金伝説』論

—「精神の解放」について

序

この作品は戦後逸早く書かれたが、当時石川淳は外郭団体（厚生省の部落問題の「同和事業。後、進駐軍によって潰れる」）に関わりがあつて働いていた。その仕事上氏は俱利伽羅峠の電車の中で敗戦を迎えている。そのときのことをモチーフにして書いたのがこの『黄金伝説』である。他にも焼けた船橋を『窮菴売卜』（昭和21・6『太平』）に、徳島県の部落問題を『寒露』（昭和21・5『新潮』）に書いている。『黄金伝説』の作中人物が諸国を歩き回っているのは実はこの未解放部落を訪ねていたことがその背景である。が、『黄金伝説』は「いくさ」とこれから歩んで行かねばならない「わたし」の生活に係わってくる。

この作品が発表されたのは終戦翌年3月（『中央公論』）、それが同年11月に『黄金伝説』（佳人・マルスの歌・雪のはて・名月

李 忠 奎

珠・寒露・窮菴売卜・無尽灯）として刊行されるけれど、肝心のこの『黄金伝説』は入っていない。かつて『マルスの歌』が太平洋戦争へと突き進もうとする軍国主義に対し、「NO!」と叫んだことによつて発売禁止にされたことがあつたが、今度は進駐軍によつて「ぼしやり」になつた。『マルスの歌』は作者自身がいうようにもう少し行けると思つたから書いたけれど、『黄金伝説』はある意味解放、自由というところから書いたはずである。しかし、これはアメリカ兵のイメージや感情に触れるからという理由に因つてまたも没になつた作品である。GHQのプレスコードによつてこの作品が書き換えられたことについては横手一彦^注が詳しく指摘している。戦後GHQの政策を考えれば戦中の軍国主義と何の変わりも無かつたと言わざるを得ない。

ともかく終戦とともにやつて来た解放感と国が敗れたことによつて、進駐軍が新たに統治することになるが、氏は解放感と

ともにそれへの憂慮を誰よりもはやく感じ取っていたのかも知れない。それは解放軍としての進駐軍というよりも、これも一つの権力の象徴には変わりないということからの不安・不信であり、しかしながらも自由に出来るだろうという明るい希望も持っていた。それが案の定の結果となつたとき氏の反俗精神はより確実なものとして以降の作品に描かれている。氏がいうように、やっぱり敗戦は解放感だけではなかった。

さて、この作品を論ずるにあたつて、戦中と戦後を考えるべきであろう。というのは、主人公である「わたし」の三つの願いにそれが隠されているからに他ならない。まず、「時計」は狂った時間の戦中と、敗戦とともに混乱した戦後を意味しており、「帽子」と「女人」は戦中と考えて論を進めて行きたい。

一、石川淳の敗戦前後

ところで、石川淳はこのいくさの季節をどう過ごしたのだろうか。少なくともこの時代に対する氏の認識を見る必要はある。なぜなら、この作品は戦後第一作目であるからである。この作品に対し、「ある決意と新しい出発を感じさせた」という本多秋五、「現実的であり、世俗的」な作品で『佳人』での「臍の発見」を蘇らせるもの^注、だとする安藤始、それから、「石川淳における戦後の出発^{法四}」と見る塩崎文雄などの説を考えてみる上でも戦中の氏の文学を確認しておく必要がある。

まず、戦中に於ける氏の生活をみよう。氏は、日中戦争と南京事件の狂気の戦争について『マルスの歌』（昭13・1）を

書いた。が、昭和11年の二・二六事件もあつて氏の軍国主義に対する批判の『マルスの歌』が発売禁止処分を受ける。「マルスの歌」が流行歌と鳴り響く中、太平洋戦争へと突入していくとともに政府の取り締まりは一段と厳しくなつた。従つて昭和10年代、特に後半はこのような作品を書くことは不可能な状況であつた。氏の艦晦はここから来るわけであるが、これについて氏は戦争による「権力の弾圧が厳しい」からでなくても江戸や中国古典に艦晦するという「必然」はあつたという。けれどもこの氏の艦晦において、氏自身の考え方を屈したわけではなかった。むしろそういう精神は以降も絶える事なく滔々と流れていたといえる。『マルスの歌』のような「軍国主義に対する猛烈な批判を書いた作品」というのはプロレタリア文学のものを別にとすると、ちよつとほかに類がない（「無意識の選択」と小田切秀雄がいうように、日本文学史から見ても数少ない作品の一つである。それ以来このような強烈な作品が無いということ）で安易な解釈をする人もいるが必ずしもそうではない。権力の弾圧が厳しくなるにつれて今までのように積極的にはできないが「遊びによる抵抗」（「遊びの精神」昭50・3）の姿勢は『曾呂利咄』（昭13・5）『鉄柵』（昭13・10）『張柏端』（昭16・10）などに見ることが出来る。その中で「文学の今日」（昭16・1）には、こう書かれている。文学者の仕事は「最も今日的な、また最も国土的なところに制約」され、その「一番強く干渉してくる」ものはいつとも「政治」であり、それは「文学者の運動を外から造型して行くような工合に打ち寄せてくる」ものだが、そのゆえに「文学の生命を無限に発展させ、文学者の青春

『黄金伝説』論

を不断に持続させる所以」でもある、と。「今日的」、「国土的制約」とは、言うまでもなくこの昭和10年代の日本と日本文学のことである。多くの文学者がこのような認識を持っていたとしても文学者の仕事をやり通したものは数少なかった。でもこれが先も言ったように当時の文学者たちの仕事であつたと見れば氏の文学は体制や権力に対抗しつつ反骨精神で一貫した文学者の一人であつたといえる。

次に、この敗戦を氏はどう受け止めていたのだろうか。

『マルスの歌』が鳴り響く暗くて息苦しい時代は敗戦によってこの国土に「解放感」をもたらした。が、そこには「解放感」だけではなかつた。この敗戦を氏は次のように回想している。

（解放感）それはありましたね。あれはなんというか、つまり、戦争屋がいくらもいしたね、戦争があつたんで、なにか書くチャンスをつかんだ、というようなのがありましたね、安っぽいのが。そんな連中は解放感があつたかどうか知らないけれども、あれは、戦争の時の解放感というのは複雑なものです。解放感もあるけれども、ともかく国が敗れたという事実もまたかなり重いもんだつたわけですからね。こっちはその日暮でしょう。末はどうなるか、見込みはぜんぜんありませんね。だから解放感と、前途がどうなるかということ、それはごく近いところで自分のことでもあるが、国のことでもある、という感銘はあつたんで、解放感があつて、それでバンザイ、という風なたちのものではなかつたですね。「遊びの精神」

と、いうように氏は「解放感」、即ち、「見込みは全然」ないけれども、しかし「前途は明るいというふうな感じ」の「解放感」を感じている。それは当然のことで自由にやれるというところが確かにあつたはずである。が、それは戦争屋が敗戦に便乗して「なにか書くチャンス」を掴む（本多秋五のいう筆を曲げて世におもねることが出来る作家たち：「大衆作家・転向作家・芸術至上主義」）のとは根本的に違うものである。一方この解放感とともに「国」、これは国家というより疲弊した国土の「日暮し」を余儀なくされた国民生活であり、それへの憂慮をも抱いた複雑な認識であろう。国民が心配している生活への不安という意味だけでなく、文学者の位置と無意識に符合するものではなかつたか。氏は「文学の今日」で「文学者の心はいつも大多数の国民の中で一番弱い力しか持たない大群と共に在る。文学が人間の限りの、この関係は渝らない」といい、さらに「国民の中から盛り上がつて来るエネルギーは文学者自身のエネルギーにはかならない」という。これこそ文学者の立場ではなからうか。

要するに氏は文学者の眼を国民に据えつつ、必ずしも「バンザイ」とは言えないが、しかし自由にやれるという「解放感」で敗戦を迎えている。これは当然戦前の思考との断絶を意味する。だから漠然と敗戦になったからという意味ではない。この「解放感」は「三つの願」、中でも「女人」の生活と関わってくる。戦を含め、敗戦になった今をどう生きるかという問題、言い換えれば自分自身が「振り子」になるという精神生活を意味する。

戦中の認識についての評価は必ずしも一様ではない。といっても『マルスの歌』以降をどう見るかということに異論がある。まず、岡本卓治は『石川淳・坂口安吾』（昭和53・7有精堂）の「戦争期の石川淳」という論文で石川淳の戦争期の姿勢に対する理解として、「石川淳が戦争期の時局の動向を無視しつづけたという点に注目する（本多説）か、その無視を生みだしたところの理由に注目する（井沢説）かによって生ずるもの」と両極するとして、いずれも「石川淳の意図したところとその結果とを短絡させており、その間の困難に満ちた闘いを切り捨ててしまった」という。そこで彼は「わたし」はいくさのあいだ、国外脱出がむずかしいので、しばらく国産品で生活をまかなつて、江戸に留学することにした。そして、明和から文化に至る何十年に日本の近代というものを発見したよ。文政以後は品物がおちるね。火事のさいちゅうでも、この江戸の近代人諸君と附合うことは焼跡見物よりもたのしかったね。（「乱世雑談」昭26・8傍点引用者）ということを安易にとつて本多のいう「逸早く戦争を待避した澄まし屋」という説と、「強い抵抗の意志なくしてはとり得ない」という井沢の説を否定した上で、彼は氏が当時、年齢（当時42歳）と「マイナーポエツト」的作家の地位があつたから井沢の言うような「強い抵抗」がありえたという。故に二人の説は短絡的だといひ、氏を戦争に対する「意識的な無視」Ⅱ「ダイナミックな認識論」という立場である。しかし、彼の説も実は井沢の認識に基づいているといえる。それから、年齢と「マイナーポエツト」が氏の強い抵抗の要因だったというのは納得行かないところである。いずれに

せよ、氏の戦争に対する強い抵抗と江戸留学に見る認識者の立場Ⅱ「遊びの精神」によつて戦中を潜り抜けてきたと言わざるを得ない。

二、「時計」と「帽子Ⅱ戦闘帽」に見る「罪の観念」

まず、この作品を素描してみると、主人公の「わたし」が狂つた時計を懐にしまつて、三つの願いを叶えるために諸国を歩き回つてゐる。敗戦を前後にした「わたし」の努力は、しかし何一つ叶えることが出来ずに終わつてしまつた。旅から帰つて来た「わたし」は道中で悟つたというように「罪の観念」と、それが「風と煤煙」の物質によるものだということを知り、それを洗い落とすことで「時計」も「帽子」も、それから「わたし」の体ぐあいも元に戻る。残つたのは懸想してきた「女人」と会うことであるが、それも敗戦を迎え、もう忘れかけていた。もはや「わたし」にとつて「外部における事件のひとつ」になるはずだつた。それが「女人」と出会つたとたん「総身たちまち燃えあがつて来」る次第である。けれども、この再会が「わたし」に異変を引起してしまふ。売笑婦として転落してしまつた「女人」を前にして「わが眼をわが耳をうたが」う。「女人」のこの転落こそ「わたし」の体の異変と密接な関係にある。「蝶が木の幹にとまる」ようにびつたりと兵隊に抱きついてゐる姿に「わたし」は絶望する。故に「わたし」の体が乱れ始め、また別れたときには正常に戻るといふところで物語は終わる。

『黄金伝説』論

ここで重要なのは「わたし」の時計が二度止まるということである。最初は電車の中で敗戦を知ったときであり、次は「女人」と会った時である。何故、「わたし」の時計が止まらなければならなかったのか。これは実に重要な問題である。これについては次章の「女人」と戦後のところに書くことにして、その前に時計の意味を先に見ることにしたい。

「時計」とは、これは言うまでもなく時間を刻むものである。時間とは過去の歴史をも意味するが、しかしここでは過去の歴史を含め、今この時勢と敗戦を迎えてもつと狂ってしまった時計による戦後の混乱した社会の不安を意味しているのは確かである。敗戦の「玉音放送」を聴いて一度止まってしまった時計がこの「あたらしい打撃を受けてのちはそれがますます狂い出して」いる。この意味では戦中と戦後を指していると考えるのが妥当であろう。しかし、「わたし」はそもそも狂った時計を懐にしまつて、それを直したいという願いを抱いて旅をしているが、軍国主義の拡張によつて狂った時間を余儀なくされた状況下で「正確な時刻の標準」を求めることはそもそも不可能であつた。にもかかわらず、それを求めて諸国を歩き回るといふのは「わたしという存在がこの風土に於ける振り子」にならうとする精神運動に他ならない。戦後の焼跡の凄惨たる状況を目の当たりにした「わたし」は「息絶えて地の底にめりこもう」とする。が、「ふところの時計の、狂いながらもかちかちと、それがまだまだというふうに、この世の時間をぎざむ音」に引き止められる。それはこの世が息を吹き返し、敗戦とともに止まった時計が再び動き始めたように戦中焼け出された「わたし」が如何に生きるかという一つの精神の闘いであつた。だからこれはこういう努力があつて、この世を「前の世の出来事」にし、新たに今を生きようとする「わたし」の精神の証に他ならない。

要するに「わたし」は狂った時計を認識し、それを直そうとする。しかし、戦中の今現在置かれた現状からは、言うまでもなく国土全体が物理的に合わされた時間を直せるような「確実な時計職人」はそもそも存在しないわけである。意識無意識を問わず、狂った時計を信じるしかなかったとき、「わたし」は『マルスの歌』に「NO!」と叫ぶように「わたし」の「生理的時間から物理的時間」を割り出している。反復して言えば、それは自分が割り出した時間のみを信じるという自分自身の生き方の発見への努力に他ならなかった。

次は「帽子」のことであるが、これは時計が物理的に合わされたように頭上から押し被さつてくる絶対的権力の象徴である。国家総動員法が成立し、今度は太平洋戦争とともに総力戦の真つ只中であつて、ここから無疵に逃れることは不可能であつた。けれども、「わたし」はこの戦闘帽を欲してはいない。それどころか「わたし」は「この異様なかぶりものを永遠にあたまの上に載せてあるくことは好まない」ので、どこか真人間が被る帽子を求めて歩き回っている次第である。しかしながら「わたし」のこの努力も虚しく真人間の被る帽子もどこにもない。なぜなら、「真人間のかぶる帽子をもとめることは真人間に頭脳に出逢うこととおなじぐらいむずかしい」ことであるからに他ならない。でも「わたし」はこの国土のどこかにはある

だろうという夢を抱き、「寄辺なく諸方を歩きまわ」る。ということは狂った時計を直せる「確実な時計職人」がいないように当然「真人間」が被るような帽子を手に入れることは出来ないのである。「わたし」のこのような努力は「女人」探しとともに雲を掴むような態で疲労と絶望に終わってしまった。「時計」が生活における水平的時間だとすれば、「帽子」は垂直的空間であるといえる。時間的空間的にこの国土に非精神の「虱と煤煙」の仕業、即ち、この非精神の重圧から逃れ、または打克つために「わたし」の「草菴」＝精神の運動という仕掛を配置している。

このように「わたし」の戦中に於ける精神の努力、いわば国家権力に対する「確実な時計職人」と「真人間」を捜し求める抵抗を見ることが出来た。「わたし」の願いが虚しく終わつたかのように見えるが、しかしこの旅から「わたし」は「わたし」の生きる道を発見する。「罪の観念」がそれである。

では、「罪の観念」とは何か。それは「わたし」が道中悟つたことに他ならない。言い換えれば、いくさが精神において「無意味なる平地」(『無尽灯』)であったことと、その天皇と天皇を中心とした権力に対し何も言えなかつたことによる「罪の観念」であつたといえる。要するに、「無意味なる平地」を生き続ける「わたし」の非精神とそれによつて黙秘していた「わたし」に他ならない。氏は「夷齋饒舌」——戦中遺文(昭35・3『新潮』、後『増補石川淳全集十二巻』、決定版『石川淳全集第十四巻』に収録)に於いて、「必ず実現すべき単純明白なる」とはなにか。この表現は決して「単純明白」でない。ここ

は「実現するはずのない曖昧むちゃくちゃな」と書くべきところであつた。それがまさに当時の実状に他ならなかつた。この「仮定」の書き方にゴマカシがあつたために、あるいはゴマカシ方が拙劣であつたために、「云々」と書き、「いくさがわたしの文章におよぼしたもつとも大きいユガミといえば、前後にこの文句一とこででないかと、わたしはおもう。ウソにはウソのつき方がある。小説家として、恥辱であつた」と、当時のことを回想している。この「恥辱」こそが「罪の観念」である。これは戦中に書いた「善隣の文化について」の一文、「すなわち、日本文化を関係諸文化の王として立てるといふ、必ず実現すべき単純明白な過程である。(これは満州に対する場合だけではない)」という文章のことである。ここで判るようにこういう非精神の生活が「わたし」に於いて「罪」であつたはずである。これは「わたし」と「女人」との関係においても重要な鍵である。

それは今日の世界の中全体のうえに圧しかぶさつてるところの途方もない罪の観念のしわざだということ、おのれの臚に疵をもつと否とに拘わらず、課せられた罪の観念の重量からはたれも無疵には逃れられないような運命の所為だということ、わたしは道中つとにさつていた。やけどするほどあつい湯を浴びて虱と煤煙とを洗い落とすと、わたしは三四ヶ月ぶりにさつぱりして、うつとうしかつた肩のこりもしぜんと軽くなつたようであつた。けれど、罪とは煤煙のようにふりかかつて来るもの、虱のように伝染して来るもの、古代印度の信仰のように罪は物質にちがひ

ない。

「正直な人間」と「真人間」を探して諸国を歩き回った「わたし」はどこを行つても出逢うことが出来なかつた。むしろ「虱と煤煙」という罪の物質に犯されてしまう。というよりも「虱と煤煙」が「世の中全体」に蔓延していることそれ自体が罪であると悟っていた。だから、「おのれの臍に疵をもつと否とに拘わらず、課せられた罪の觀念の重量からはたれも無疵には逃れられぬ」運命として国土全土に圧しかぶさつてきたことに「わたし」は疲労と絶望を感じる。「煤煙のようにふりかかつて来るもの、虱のように伝染して来るもの」の「古代印度の信仰のように物質」の「今日の世の中全体のうえに圧しかぶさっている」「虱と煤煙」に対し、「罪の觀念」を抱く。言い換えれば、戦時中の狂気をどう考えても精神の作用とは思われないし、それによつて直面しなければならぬ今日を認識するのは言うまでもなく精神作用である。故に、罪として課せられた物質を洗い落とすことで「うつとうしかつた肩のこりもしげんと軽く」なり、「わたしのからだぐあいは非常によく、血色も冴え、すこしはふとつても来て、物ごころついて以来はじめての健康ぶり」で、身体すべて故障がなくなつて来た。それだけでなく、「時計もまたそうむちゃには狂わないようになって」来て、「グリニッチ天文台の時計にくらべてあまり大きい誤差」もなく、「正直な人間」を探する必要もなくなつてきた。「帽子」に於いても戦闘帽を投げ捨て、今は「はからずも、あたらしい、まともな恰好のかぶりものをあたまたの上に載せる」と「心たのし」くなつて来る。こうして「時計」も「帽子」もなんと

か間に合つてくる次第である。

「罪の觀念」であつた「虱と煤煙」を洗い落とすとは、戦中、無理矢理に押し付けられた「時計」を直し、「帽子」も「戦闘帽」を捨てることによつて、本来健康体であつた「わたし」に戻るといふ精神運動の謂である。「物質」が「罪」であることは、「物質」が非精神であるからに他ならない。「いくさの見かけの波瀾は、精神の運動にとつては、じつは無意味なる平地であつた」(『無尽灯』)というように、「わたし」の敗戦を前後にした旅は権力に対する抵抗とその精神運動だとすれば、戦中の「時計」も「帽子」も非精神の物質であらう。そして、「女人」と再会した時正常であつた「わたし」の体や時計や帽子が乱れるのは、「女人」が戦中の非精神に転落したまま戦後を生きてゐることへの激しい拒否反応に他ならないものである。

三、「女人」と戦後

戦中、「女人」は「わたし」に「お足もとにお気をつけくださいませ、そこを左へおまがりあそばして、それから右へ」と道を教えてくれたことがあり、そこで「わたし」は恋人でもあるかのように思い続けて来た。そこで戦争は激しくなり、ずつと懸想してきた「女人」の行方が分からなくなつて諸国を歩き回つたが、願ひは絶望に終わつてしまう。でも、終戦と共に「わたし」の「時計」も「帽子」も間に合い、体具合も健全に戻つて来たこともあつて「わたし」が懸想してきた「女人」のことはもう「外部におこる事件」として忘れていた。とこ

ろが、終戦直後横浜の一角で偶然と「三四ヶ月わたる難波の旅をつづけ諸方あまねくさがしもとめたところの、そして今やいささか忘れかけているところの、そのひとの顔」を見る。もはや「外部におこる事件」となっていたのが、今は「総身たちまち燃えあがつて来」た「わたし」は「体内の血の気が次第にうせて肉がげつそり落ちて行くのを感じ、悪寒にふるえ、手足だるく、呼吸くるしく、からだぐあい急にわるくなりはじめ」た。それだけでなく「あたらしい鳥打帽はぶざまに横にゆがみ、ふところの時計のかちかち鳴る音はとどえて、針はすでにとまってい」る有様である。「外部におこる事件」でなくなっていた。何故だろうか。それは「女人」の生活にあつた。

「女人」は横浜の特別地帯の身となつて、「ことばつかいいい、なりのこしらえといい、物腰格好といい、良家の出のひと」と思われなほど変わつてしまつた姿に「わが眼をわが耳をうたが」つた。今や「道ならぬ契を交わしてかえるきぬぎぬの恋人」と思えてきたあの時の「良家の出の人」と思つていた「すがた」と「声」は売笑婦のそれに変わつてゐる。これが「女人」の生活であつた。けれども「わたし」にとつて、やはり、戦中道を教えてくれた「むかしのすがた、むかしの声」に他ならなかつた。そこにはずっと懸想し、「女人」の眞の姿を求め続けてきた「わたし」がいるわけであるが、もはやそこには「わたし」の求める「女人」の姿はなかつた。

終戦を迎え、全ての価値観が転倒し、混乱した社会の中で如何に自分を見つめ直して生きていくかと言う精神の作用による生き方、言い換えれば「わたしという存在が風土に於ける振

り子」としての生き方を見つける努力をして来た。ところが、「女人」は戦中の「良家の出の人」から予想もしなかつた売笑婦に転落しているばかりでなく、「蝶が木の幹にとま」（傍点引用者）たような姿で進駐軍の兵隊にくつ付いて生きている。「わたし」がやつと自分自身を見つけたのに対し、「女人」の生活はバラサイト的非精神の生活に他ならないと言える。しかも「永劫に決してこちらへはふり返らないであらうけしき」である。勿論「こちら」とは戦後新たに歩み始めた「わたし」の精神生活であり、民衆の生活に他ならない。にも拘らず、「女人」は背をこちらに向けたまま生きて行こうとする。そこで「右」「左」と声を掛けたい「わたし」であるが、戦中、何もしえなかつた自分の罪がただ「死ぬほどはづかしくなつて」この場を駆け出してしまふ。要するに「わたし」の体の異変と「死ぬほどはづかしくなつて」、「女人」に何も声を掛けられないというのは戦後の日本と自分との「罪の観念」に対する自己批判的認識であり、「女人」に対する生理的絶望感である。故に再び「わたし」が民衆の生活に戻ると同時に「体内の血が活潑にめぐりはじめ、筋肉が盛りあがつて、悪寒がやみ、手足たしかに、呼吸ととのい、からだぐあいがたちまち順調に復して来た。そして、ゆがんだ鳥打帽がいつかきちんと直つていて、ふところの時計がきもちよくかちかちと鳴り出して」本来の自分の体を取り戻すわけである。敗戦とともに止まり、狂いだした時計が「罪の観念」への自己反省だったとすれば、「女人」に会つて止まつた時計はこの戦後を生きる上での自己反省の再確認であつたといえる。

『黄金伝説』論

さて、このような「女人」の生活を『無尽灯』（昭21・7）の「弓子」の生活に見ることが出来る。『無尽灯』の主人公の「わたし」と弓子の生活は『黄金伝説』と同じく「わたし」に対し、非精神の生活が描かれているといえる。「おまえが軍のまわしものと知らなかった。勤労奉仕に出ないというところに、おれの真実がある。胸膜炎だつて、まんざらウソじゃない。おれのからだは、こうして平気じやいるが、医者に見せたらきつと難癖をつけるにちがいない。勤労奉仕に出たら請合つて胸膜炎になつてみせる。なんだか血を吐きそうになつて来た」という「わたし」は弓子と違つて「胸膜炎」を偽る。「胸膜炎」とは、「今や「わたし」のわずかに身を寄せるべき仮の宿は、あわれむべし、胸膜炎のほか無かつた。胸膜炎は「わたし」のささやかな草菴」であり、「この草菴の図形は、もし中みを割つてみたとすれば精神しか無い」ものである。いわば、精神生活の謂であろう。これに対して弓子はどうか。弓子は「墮落」ということがかんがえられない。弓子の生理の中には、墮落という観念がぜんぜんはいつて来ないようなぐあいだね。あの肉体がモラルを生きているようなものだね。どうして大した權威なのだよ。そして、当人は自分の權威には気がつかないで、なにか他の權威をもとめがしている。そして、それがなかなか見つからないので迷つている。貪婪だよ。何でも食つてしまう」ものである。戦中に作り上げられたモラルを生きる弓子に当然のごとく「墮落」の観念があるはずがない。そこには食つても飽きることを知らない權威主義だけが弓子の生甲斐であり、生そのものである。弓子は日ごろ「絶体絶命」、「勝」、「勝

ち抜く」、といった俳句を作るようになり、今度は「必勝、必勝、必勝」と書いた。それを目の前にした「わたし」は逆上し、追い出してしまふ。それは「胸膜炎」を患っている「わたし」から見れば、最も精神の運動とは思われない「心願成就」や「商売繁盛」の神棚においてある札と同様の物質的存在に過ぎなかつたからである。それはいわば、「物質化」してしまつた非精神の弓子と「わたし」の精神運動を配置している草菴はそもそも相容れないものであつた。

ここで、「人間精神」と「物質精神」について「わたし」は下記のようにいう。

人間精神がいかに美しいはたらきをするか、まのあたりに知ろうとすれば、精神が物質と戦つてついにそれを征服したところの形式に於いて見とどけるほかない。精神の運動はいつも物質の運動よりも速いだろう。また精神の達すべき目的は、物質の達すべき目的よりも、かならずや高次の世界にあるだろう。

「精神の運動」は「物質の運動」より、常に「高次の世界」にあり、「わたし」が仕掛けた「草菴」はいうまでもなく精神そのものであつた。弓子も「女人」もこの「物質の運動」であつた戦中の非精神の化身であるといえる。

この「女人」と「わたし」について高野良知は「女人」を「既に新しい時代に即応して生きて行こうとする女性」と「戦前のままの旧来の女性像」との「新・旧二重の姿を有つ」女性として捉え、だから体が乱れ、彼女から突き放されたときには正常に戻ると言う。さらに、「女人」には「人間の精神」が託

されていて、主人公の「わたし」が拒絶されたが故に「立ち直りの展望が見出せない」という。それが「わたし」の「絶望」となるが故に、「絶望からの再生」が氏の戦後の出発であり、この作品の最も重要なモチーフだという説には首肯できない。というのは、「女人」に「人間の精神とか魂」が愚かされているといながら、「二重の姿」云々とは何事か。「わたし」が「女人」の姿を見て体の異変を起こしたとは思わない。「わたし」が仕掛けた草薙は精神であつたはずである。それから「絶望からの再生」が主題だということは一部認めるけれども主題ではない。この作品に隠されているのは物質のような非精神、言い換えれば「物質精神」に対し、如何に「人間精神」を獲得していくかということに他ならないのだから。

結

わたしは何といつて呼びかけよう。足もとにお気をつけ下さい、とおうか。左へまがりなさい、それから右へ、とおうか。しかし、わたしの発しうることばとはなく、ただ死ぬほどはずかしくなつて、もうなにも判らず、駅前の広場のまんなか、雑多なひとの渦の沸き立っているほうへまっしぐらに駆け出した。

このように、『黄金伝説』は三つの願いのために諸国を歩き回つた「わたし」の生き方、即ち、この国土に押しつぶさされている「罪の観念」を如何に克服し、また戦後の困難な時代を如何に生きるかという自分が自分であることへの精神運動の回復

を提示したといえる。ヨーロッパ中世の暗黒時代における福音書としての『黄金伝説』がヒューマニズム精神の解放を未来に託したように、石川淳は戦後の新たな出発に於いて物質精神を乗り越えた「精神の解放」を託したといえる。

一章の「石川淳の敗戦前後」のところで私は二三の評価を書いたが、本多がいうように「女人」は何かの象徴であるが「時計」や「帽子」は何を意味しているのか判らないというように、この作品が発表されたときに、あまり理解されなかつたようである。それから、安藤の「臍の緒」説は戦後の出発と言う点では頷けるけれど、氏の文学から見ればそうでもない。塩崎や野口武彦も戦後の出発という意味で本多に近い。そして佐々木基一高野のように「絶望と再生」が主題とする説は、たとえば石川淳の作品をこの主題のモードで読もうとしたら殆どが当て嵌るであろう。だからというよりもこの作品は戦後の生き方を提示したものと考えたい。

注一、横手一彦『近代文学論集』第23号（1997・11日本近代文学会九州支部）

——『黄金伝説』は二度つくられた

二、本多秋五「抵抗の作家 石川淳の登場」（『本多秋五全集』第7巻（1995・8））

三、安藤始『石川淳論』（昭62・5）

四、塩崎文雄『日本文学』（昭52・12）

「石川淳における戦後の出発」——生活の根源的収斂の意義をめぐって

- 五、無意識の選択『昭和十年代を聞く 石川淳氏』（昭47・7）（原題）
後『文学・昭和十年代を聞く』（昭51・10）として再収録
- 六、本多秋五『戦時戦後の先行者たち』（昭46・4）——「石川淳論」
『佳人』によって何気なく花道に現われ、『曾呂利咄』によって逸早く戦争を待避した澄まし屋の石川淳にあつては、今後いかなる謀を案じだすかは計り知られぬ。
- 七、井沢義雄『石川淳』（昭36・6）
氏は氏の抵抗のつよさゆえに整然と身を処した。この抵抗の強弱をその背後において支えるものはなにか。ひとりの文学者たるものがまさにこれを把持し、抛つてもつてたつべきものであるところの、彼自身の懐抱する文学観の、文学的理想の強弱である。
- 八、高野良知『石川淳研究』（平3・11）「黄金伝説」論——絶望からの再生について
- 九、野口武彦『日本近代文学大事典』（昭52・11）
- 十、佐々木基一『日本文学事典』（昭43・1）

（イ）チュンギュ・博士課程一年）